

障がいの有無、性差からみた運動教室の社会的意義について

—子ども運動教室に参加する保護者の調査からの考察—

Social awareness in movement classrooms from the perspective of whether or not disabilities and/or gender differences are present
— Observations of a guardian who participates in a children's movement classroom

金子 勝 司*・大 月 和 彦**
Shoji KANEKO, Kazuhiko OTSUKI

要旨：本研究は、筆者等が主催する幼少期の子どもを対象とした『子ども運動教室（障害の有無を問わない）』において、そこに参加する子どもの保護者に対し、参加動機や教室に求めるもの、この運動教室を通して子どもの日常生活における変化や運動面に関する変化の調査を実施した。その結果から幼少期の子どもを持つ保護者は、地域で行われる運動・スポーツ教室に何を期待しているのか。障がいの有無、性差の違いから、幼少期を対象とした運動教室の社会的意義について考察する。

キーワード：子ども、運動教室、社会的意義、保護者

I 研究目的

近年みられる運動能力の低下には運動の出来る子、運動の出来ない子の二極化傾向にあるとの調査結果が報告されている¹⁾。その理由は、保護者の中で読み書きや計算といった勉強が最優先になり、運動やスポーツを軽視する風潮が挙げられる。次に遊びの多様化である。現在の傾向としてゲーム等室内で遊ぶ子どもが多く、体を動かす機会が減っていることが挙げられる²⁾。反面、子どもの運動機会の減少によって、我が子の健康を不安視する保護者も少なくなく、運動の習い事に参加する子どもも増加傾向にある。一方、発達障害をもつ子どもの場合、集団活動が難しいため地域のスポーツクラブにおいて入会を断られたり、また入会後に集団に馴染めない様子を保護者が目の当たりにし、結果保護者自ら退会を申し出るといった事も多く報告されている。そこで1対1の個別指導を行っている体操教室等、体育の苦手な子ども達の運動専門の塾に通わせたり、家庭教師をつけるケースも最近増えている³⁾。このため、本研究では、本学で行っている「運動教室」をフィールドとし、地域の運動・スポーツ教室が、子どもに対しどのような社会的意義を担っているのか、子どもの保護者を通して障がいの有無、性差、年齢の違いから考察していく。

II 研究の概要

1. 調査方法

①調査方法：A大学で実施している『子ども運動教室』（以下、適宜「運動教室と略記」）に参加する3～7歳までの子ども（47名）の保護者に対して、質問紙による調査を実施。

*かねこ しょうじ 大阪体育大学教育学部

** おおつき かずひこ 文教大学教育学部

- ②開催日：平成 25 年 4 月 18 日～6 月 27 日（週 1 回 計 10 回のプログラム）
- ③質問項目：教室に参加した『目的・動機』、『満足度・満足度の理由』、『教室に求める内容』、参加後の『行動、生活面での変化、影響』等の質問項目を準備した。
- ④集計結果：44 名 / 47 名（男子 33 名 女子 14 名）【回収率 94%（男子 91% 女子 100%）】
- ⑤分析方法：主に自由記述で得られた回答をもとに考察を行う。

Ⅲ 結果

1. 参加者の特徴

年齢や男女比については表 1-1 に示す通りである。そのうち障がいのある子どもの参加は 14 名であった。特徴は、広汎性発達障害（5 名）、広汎性発達障害の疑い〔医師の診断〕（3 名）、自閉症・精神遅滞（1 名）、弱視（1 名）、吃音症（1 名）、癲癇（1 名）、聴覚障害（1 名）、ダウン症（1 名）であった。その他、障がいはないが、よく転倒する、走り方がぎこちない、柔軟性がない、集団に馴染めない等の日常生活の様子から不安を抱えた子どもが多く参加している。

表 1-1 年齢と性別のクロス表

年齢	性別		合計
	男の子	女の子	
3 歳	4	3	7
4 歳	5	4	9
5 歳	10	3	13
6 歳	5	1	6
7 歳	6	3	9
合計	30	14	44

表 1-2 障がいの有無について

	人数 (%)
ある	14 (31.8)
ない：男	19 (43.2)
ない：女	11 (25.0)
合計	44(100.0)

2. 子ども運動教室の満足度とその理由

運動教室の『参加の満足度』の質問（すごく良かった・まあ良かった・どちらともいえない・あまり良くなかった・良くなかった）の 5 段階の評価に対し、「すごく良かった」（90.9%）、「まあ良かった」（9.1%）と回答した。その理由（自由記載）は以下のとおりであった。

表 2-1 障がいのある子どもの保護者の回答（一部抜粋）

1	学生先生がとてもよく指導してくれたおかげで毎週楽しみに来ていました。	7	楽しそうな子どもの姿を見て、毎回また行きたいという姿をみれてとてもうれしかった。
2	初対面のスタッフと信頼関係を築き、安心感を本人なりに得たうえで取り組みに参加できたことがよかった。	8	当初はじっと待つこともできず全然別メニューでした。今回から体操もできるようになり喜んでいます。
3	少人数とはいえ、大勢で動くことや協調性についても学びました。年齢別に分かれていましたが、学年で分けていないところがよかったです。	9	担当の学生スタッフがいること。丁寧な指導、笑顔での指導がとても印象的でした。
4	集中力・運動・コミュニケーション能力等が乏しいわが子に対してもあたたかい対応をしていただき有難かったです。	10	できない原因を探って伸ばしてくれることがうれしかった。また学生スタッフがたくさんほめてくれるのが非常に良かった。
5	子どもの目線に立ててもらえたこと。	11	父親として家族以外の人たちと楽しそうに遊んでいる姿を見れたのは素直に感動しうれしいことです。
6	次も参加したいくらい良い内容でした。		

表 2-2 男の子の保護者の回答（一部抜粋）

1	学生一人ずつついてくれるので、子どもたちは喜んで楽しそうにしています。いろいろと教えてもらうことにより、体力もつき運動能力も上がったと思います。	9	スタッフがついてくれて子どもが本当に楽しそうでした。
2	子どもがとにかく楽しそうに運動をしている。学生たちに遊んでもらえることが嬉しそう。普段関わることのない世代と関わることがよかったです。	10	子どもが楽しそうにできている。毎週木曜日が楽しみの様子が見られました。
3	毎回詳しくプログラムが書かれていた紙をいただいてわかりやすかったです。	11	先生方が、子どもたちの目線で接してくれ、また何より子どもがすごく楽しんで参加していた事がよかったです。
4	一緒に遊んでもらえるのがすごく楽しかったようです。体力測定の記録が伸びていたので、教室に通わせてもらった成果が出てよかったです。	12	苦手なスキップと縄跳びが少しできるようになった。
5	今までは誰かのまねをして運動していたが、人から教わって運動することができるようになった。	13	ルールを守れるようになったことや、集団行動の勉強になったと思います。
6	子どもが毎回笑顔で帰ります。次の日、自宅でまた練習をします。	14	マンツーマンで一人ひとりに寄り添ってくれているので安心してみる事ができた。学生スタッフが皆さん熱心であたたかい雰囲気もとてもよかったです。
7	順番を少し守れるようになった。	15	わが子の成長を見ることができたことです。
8	毎週行くのを楽しみにしています。走り方、ボールの投げ方等ができるようになってきました。	16	スタッフの励ましとわかりやすい指導。本人の気持ちも前向きになった。

表 2-3 女の子の保護者の回答（一部抜粋）

1	逆上がりがもう少しのところまでいけた。なぜか2人とも教室に行くのを嫌がることもある。	6	すごく走るのが好きになった。
2	子どものやる気がない時でも、やる気になるよう努力してくださった。	7	運動の内容もよく考えられていて子どもが上達しているのが感じられた。運動だけでなく子どもがあきないようにダンスなど楽しめる内容もあって良かった。
3	次も参加したいくらい良い内容でした。	8	毎回、子どもが楽しんで行っているから。
4	最初は全然できなかったが、回を重ねるごとにできるようになったこと。	9	子どもも喜んで参加するし、普段なかなかしない鉄棒や跳び箱などさせてもらえるから。
5	波はあるが私がついていなくても一人でできる日もあったことが収穫です。		

運動教室の満足度について、我が子が「運動を好きになった」「教室を楽しんでいる」「意欲的に取り組んでいる」といった、教室時の子どもの観察から得られた印象が評価に大いに関連している。障がいの有無、性差の違いでみると、障がいのある子どもの保護者では、「子どもの笑顔」「他者との関わり」「家族以外で楽しそうな姿」「スタッフの対応」等、コミュニケーションが充実したことによる評価。男の子の保護者では、「体力」「運動技能の向上」「活動を通したルールを理解」等の運動面に対する評価。女の子の保護者では、我が子の「指導者の対応」が評価され、それぞれに評価視点の違いをみることができた。

3. 参加した動機

運動教室に参加動機について、障がいのある子どもの保護者では、運動環境が少ないことによる「運動が苦手だから（22%）」や「何か運動をさせたい（17%）」、また「体調や体力面の不安（17%）」によるものが多かった。男の子の保護者では、就学前の「何か運動をさせたいと考えていた（14%）」、「運動技術を身につけさせたかった（16%）」といった技術面の向上や「集団行動を学ばせたい（16%）」、「ルールを学ばせたい（16%）」といった社会性に関する項目が上位を占めた。女の子の保護者では、男の子と違い日頃運動をする機会がない、または活動しないことによる「体調・体力の不安（17%）」、又は「運動が苦手ではないか（17%）」という、障がいを持つ子どもの保護者同様に、運動する機会を作りたいという傾向であった（表3）。

表 3 障害の有無、性差からみた参加動機（複数回答）

障がいの有無	体調や体力に不安があった	個人的に時間が取れた	友人に誘われた	無料だから	何か運動をさせたいと考えていた	運動技術を身につけさせたかった	集団行動を学ばせたい	友達を作りたい	ルールを学ばせたい	運動が苦手だから	その他	合計
ある	6 (17%)	0 (0%)	1 (3%)	0 (0%)	6 (17%)	4 (11%)	5 (14%)	1 (3%)	3 (8%)	8 (22%)	2 (5%)	36
ない：男	3 (6%)	0 (0%)	2 (4%)	5 (10%)	7 (14%)	8 (16%)	8 (16%)	2 (4%)	8 (16%)	4 (0%)	3 (6%)	50
ない：女	5 (17%)	1 (3%)	1 (3%)	4 (14%)	2 (7%)	3 (10%)	4 (14%)	0 (0%)	3 (10%)	5 (17%)	1 (3%)	29
合計	14 (9%)	1 (1%)	4 (3%)	9 (8%)	15 (13%)	15 (13%)	17 (15%)	3 (3%)	14 (12%)	17 (15%)	6 (5%)	115

4. 実施してほしいプログラム

今後希望するプログラムについて、多くの保護者が「今回と同様のプログラム（38%）」と回答した。その他の回答を障がいの有無、性差の違いでみると、障がいのある子どもの保護者または女の子の保護者では、その他に違いはみられなかった。男の子の保護者では、「投げ（19%）」や「器械運動（19%）」と学校体育に関連する回答が多かった。（表4）。

表 4 障害の有無、性差からみた実施してほしいプログラム（複数回答）

障がいの有無	今回と同様のプログラム	技術を中心としたプログラム	「遊び」を中心としたプログラム	「投げ」を中心としたプログラム	「走り」を中心としたプログラム	「器械体操」を中心としたプログラム	その他	合計
ある	10 (43%)	1 (4%)	3 (13%)	4 (17%)	2 (9%)	3 (13%)	0 (0%)	23
ない：男	12 (39%)	1 (3%)	1 (3%)	6 (19%)	2 (6%)	6 (19%)	3 (10%)	31
ない：女	5 (28%)	3 (17%)	3 (17%)	2 (11%)	2 (11%)	2 (11%)	1 (5%)	18
合計	27 (38%)	5 (7%)	7 (10%)	12 (17%)	6 (8%)	11 (15.3%)	4 (6%)	72

5. 日常生活における運動への取り組みの変化

日常生活における運動への取り組みの変化について、保護者共通の回答は「体力がついた」「自信がついた」等の心身の成長に効果があったと回答している。また、障がいのある子どもの保護者では、「頑張って取り組もうとする」「意欲的になった」「学校でもルールが守れるようになった」「人見知りが改善」「気持ちの立て直し」「集中力」「以前に比べ外遊びをする」「家の中でも自ら運動をする」「他の遊びに向かう足がかりになった」等であった（表5-1）。男の子の保護者では、「体力がついた」「自信がついた」「家でも運動するようになった」「新しいものにも興味を持つようになった」「走りが速くなった」「友達と体操やサッカーなどをやりたいという気持ちになった」「運動が好きになった」「積極的に取り組むようになった」等であった（表5-2）。女の子の保護者では、「体を動かすことを嫌がらなくなった」「積極的、逆上がりできるようになった」等（表5-3）、どの保護者も運動教室で得られた運動面での自信、また日常生活の様々な面において大きな効果が得られていることが報告された。

表 5-1 障がいのある子どもの保護者の回答（一部抜粋）

1	何でも頑張って取り組もうとする姿が見られるようになりました。	7	外で遊ぶようになった。
2	体力がついた。いろいろと教えてもらったことで自信がついたように思う。	8	けんけんをします。
3	「明日は木曜日だ。体操だ。」と自分で楽しみにしているところが今までにないこと。すごく意欲的になりました。翌日の金曜日だけは学校でもルールを守れるようです。先生の声もよく耳に？	9	以前に比べ、楽しく運動するようになった。
4	できるようになったことへの自信がついた。	10	縄跳びや馬跳びを積極的にできるようになった。家の中でも自主的にトレーニングをしています。
5	人見知りの改善。気持ちの立て直し。運動に自信。	11	縄跳び等に興味を示し熟中するまでになりました。他の運動・遊びに向かう足がかりになりました。
6	力はまだですが、運動すること乗り物などに集中するようになってきました。		

表 5-2 男の子の保護者の回答（一部抜粋）

1	体力がついた。いろいろと教えてもらっているので自信がついたように見える。	7	友達と体操やサッカーなどをやりたいという気持ちになった。
2	家でもイスや柵からジャンプして楽しんでいる。	8	運動が前より好きになった。
3	何でも頑張って取り組もうとする姿が見られるようになりました。	9	教室で教えて頂きできるようになったことが沢山あり、積極的に取り組んだり楽しんで運動しています。
4	今までにない運動等に興味を持ち、学校の先生たちに披露したり、自信に繋がったような行動がでている。	10	初めての事に対して不安が強いので、この教室でいろいろ体験させてもらい、いろいろな運動に挑戦する気持ちが出てきた。
5	いろいろなスポーツに興味が出てきたようで、やってみようというものが増えた。運動教室でやっていることを家でもやるようになった。	11	運動に取り組めるようになりました。
6	走ることが早くなりました。体力がついて長時間座れるようになった。		

表 5-3 女の子の保護者の回答（一部抜粋）

1	逆上がりができるようになりたい気持ちは強くなった。（その代りできない時の落胆も大きい）	4	教室で教えて頂きできるようになったことが沢山あり、積極的に取り組んだり楽しんで運動しています。
2	教室でやったことを家で練習することもあったり、体操ごっこで体を動かすようになりました。	5	体を動かすことを嫌がらなくなった。
3	ペダルなし自転車に乗り始めました。		

6. 日常生活における生活面での変化について

日常生活における生活面での変化について、障がいのある子どもの保護者では（表6-1）、「できないことも何度も練習しようとする」、「毎日が楽しそう」、「自分で予定を考えるようになった」、「決められたルールを意識する」、「仲間を大切にする」、「集中力」、「運動をやる気になった」、「生活にメリハリがついた」等、運動教室を通して意欲的に行動ができて生活面に良い効果が出ていることが報告された。男の子の保護者では、「運動方法の理解」「復習」「よく眠る」「外遊びの機会が増えた」「自信がつき積極的になった」「ルールを守る」「集中力がついた」「今まで以上に運動する」「出来なかったことが出来るようになり自信に繋がった」「何事も楽しんで取り組む

ようになった」等、運動教室で得た自信から今までよりアクティブに活動するようになったことが報告されている（表6-2）。女の子の保護者では、「運動に興味を持つ」「集中力」「人に慣れる」「体力がついた」「運動嫌いが改善された」、「出来ない事もチャレンジするようになった」等、男の子同様に運動への興味に良い変化があったことが報告された（表6-3）。

表6-1 障がいのある子どもの保護者の回答（一部抜粋）

1	できないことも何度も練習しようとしていること。	7	運動を積極的にするようになった。
2	どこに行くか（体大）、何をするか（体操）をわかってきて毎日が楽しそうだった。	8	座って先生の話を聞くことができた。
4	木曜日やから運動教室があるね！等、自分で予定を考えるようになった。	9	運動をやる気になってきた。
5	決められたルールを少し意識したり、仲間を大切にしている。	10	運動の時間、読書の時間と決めて行うのでメリハリができた。
6	前よりも集中力がついた。また人に慣れてきた。	11	メリハリがついてきた。

表6-2 男の子の保護者の回答（一部抜粋）

1	スポーツのルールやコツが分かる様になった。スポーツに興味を持って自宅でも教室で行った事を復習？するようになりました。また朝までぐっすり寝るようになった。	7	ルールをちゃんと守れるようになったこと。
2	今までよりも外に出て運動する回数が増えた。	8	集中力がついてきた。
3	自分から進んでするようになった。	9	今まで以上に積極的に運動するようになった。
4	運動で自信が付き積極的になった。	10	よく寝るようになった。
5	早寝早起き。	11	できなかったことができるようになり、それが自信につながっているようです。何より子ども達自身が楽しんで取り組んでいることがうれいしいです。
6	一番を目指すようになった。		

表6-3 女の子の保護者の回答（一部抜粋）

1	運動に興味が出てきた。	5	少し体力がついてきたと思う。
2	前よりも集中力がついた。また人に慣れてきた。	6	運動嫌いが少しましになりました。
3	早寝早起き。	7	いろいろな運動にチャレンジするようになった。
4	よく寝る。	8	できないことも何度も練習しようとしていること。

Ⅳ まとめ

障がいのある子どもの保護者は、「子どもの笑顔」「他者との関わりを通じた協調性」「家族以外と遊んでいる姿」、「スタッフの対応」等、多くの保護者が子どものコミュニケーションの充実ぶりに高い評価をした。これは普段、障がいを持つ子どもの多くが他者との関わりや運動指導を受ける等の機会の少なさがこのような評価に繋がったといえる。男の子の保護者については、運動技能の上達や運動量の増加等に大きな期待があり、次いで集団活動を通じた社会適応能力を学んでほしいという期待であった。運動教室を通して、「できた」「褒められた」といった成功体験から、日常生活においても様々な面において意欲的になったという変化も報告された。女の子の保護者は、障害を持つ子どもの保護者と同様に「体調・体力の不安」、または「運動が苦手ではないか」という不安が参加を決定づける大きな要因であり、自身の子どもが楽しく体を動かす機会をこの運動教室に求めていることがわかった。以上の事から、幼少期の遊び場環境の減少により、地域のスポーツ・運動教室の役割はこれからも益々重要視されていくことが考えられる。

運動が好きな子どもだけでなく、保護者が抱く子どもの体調や体力、運動能力への不安、他者へのかかわりの減少によるコミュニケーション力の不安等を解決する役割を地域の運動・スポーツ教室は担っている。特に運動の苦手な子や障害を持つこどもの運動環境は、家庭だけでは解決できないこともあり、このような誰もが運動できる地域の環境整備が必要になっていくであろう。

引用・参考文献

- 1) 文部科学省：平成 26 年度『全国体力・運動能力 運動習慣等調査報告書』pp6-7
- 2) Benesse 教育研究開発センター 教育情報サイト「おさまの習い事に関する調査」
http://benesse.jp/vote/voteBackCommentList_3160_5.html
- 3) 赤松喜久 (2013 年 6 月)「低下している現代の子どもの運動能力」—親が子どもにしてあげられること—
<http://www.sakaiku.jp/column/exercise/2013/004922.html>
- 4) 内閣府大臣官房政府広報室 2009「体力・スポーツに関する世論調査」世論調査報告書
- 5) 日本レクリエーション協会 2004「子どもの体力向上」
<http://www.recreation.or.jp/kodomo/myself/old.html>
- 6) 運動苦手な子、障害持ちの子も支える「スポーツひろば」AERA 2012 年 11 月 26 日号
- 7) 赤堀方哉・山口泰雄 2000,「地域における子どもスポーツへのコミットメントがコミュニティ・モラルに及ぼす影響に関する研究」日本スポーツ社会学会編『スポーツ社会学研究』第 8 巻
- 8) 親野智可 2007「二極化する子どもの運動」 <http://www.nikkeibp.co.jp/sj/2/column/da/13/>
- 9) 金子勝司・東野充成 2007,「地域スポーツと子どもの発達に関する社会学的研究の意義と方法」『共栄児童福祉研究』第 14 号, 80-86 頁